

Title	アン・ヘアリング、ジュールズ・キャッシュフォード著, 森雅子[第I巻]、藤原達也[第II巻]訳, 『図説・世界女神大全』
Sub Title	A. Baring and J. Cashford (Japanese tr. by M. Mori and T. Fujiwara), The myth of the Goddess : evolution of an image
Author	杉本, 智俊(Sugimoto, Tomotoshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2008
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.77, No.1 (2008. 7) ,p.97- 106
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20080700-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アン・ベアリング、ジュールズ・キャッシュユフオード著

(森雅子「第Ⅰ巻」、藤原達也「第Ⅱ巻」訳)

『図説・世界女神大全』原書房(二〇〇七年一〇月)

Anne Baring and Jules Cashford, *The Myth of the Goddess: Evolution of an Image* (1991), London: Penguin Books Ltd.

第Ⅰ巻四十四頁、第Ⅱ巻四十四頁(五七)頁

杉本智俊

本書は、西アジア・ヨーロッパ世界を中心に、考古資料や銘文資料、図像資料を用いて人類出現の始原から現代までの女神神話の系譜をたどる壮大なプロジェクトで、本文だけでも八五〇頁を超す量を要している。著者たちの論点は大きく二つある。人類の歴史には一貫して共通した女神神話の表象を認めることができ、それは我々の集合的無意識の一部となっていること、及び、男神を中

心とした神話が発達するにつれ女神は制圧されていったが、そのような支配的文化の影にも女神の表象は残存していることである。結論として、現在の「男性原理」に立った社会は、好戦的で、言語に基づいた秩序を重んじ、世界を物質と精神、善と悪、光と闇のように二元論的に理解しがちであるが、「女性原理」を取り戻すことで、物質世界と精神を一体化した「生命統一体」として見、

感性を重視し、平和を求める社会をめざすべきだと主張している。

本書は全部で十六章からなっており、最初の三章では約二万年前の旧石器時代から女神の表象が認められ、当初は「グレート・マザー（大母神）」として単独で自分自身から世界を生み出す存在として礼拝されていたことが示される。男神を含むすべてのものは彼女の子供たちで、生命を持つており、「精神」と「自然」、「心」と「物」、「魂」と「肉体」のような区別はなかったと議論される。著者たちによると、この種の文化は新石器時代に継続され、青銅器時代のクレタ島（ミノア文化）でも豊かに開花していたとされる。

旧石器時代では、フランス・ローゼルの女神像やヴィレンドルフの女神像（石偶）等を通して、「生命」を生み出す女神崇拜が中心であったことが指摘される。また、フランス・アリエージュ地方（レ・トロア・フレール）やラスコーの洞窟から、洞窟が女神の子宮であったこと、螺旋模様や蛇が洞窟内を蛇行する原初の水を表現し、月の満ち欠けが生命のリズムを反映し、鳥が目に見えない世界と現実世界をつなぐ存在として理解されていたことが論じられる。動物に対しても、征服欲から狩猟すると

いうより、敬意を表し同意を求めて狩猟するために壁画を描いたとされ、この時代に争いの証拠は存在しないことが指摘される。トランス状態になったシャーマンは鳥や馬によって彼岸に導かれるが、再生することができる。このような女神の神話では、天界と地上、生と死を分けて考えず「生命の統一」として理解されていたこと、女神の神話は狩人の神話を内包するものであったことが議論される。

新石器時代（二章）には農業が始まり、文字が発明されたが、やはりグレート・マザーが生と死と復活の女神として天界と地上のすべてを支配していたことが示される。ユーゴスラヴィアのヴィンチャ文化を中心とする「古ヨーロッパ文化」、アナトリアのチャタル・ヒユック、イギリス・エーヴベリーやマルタ、アイルランドの巨石文化等が俯瞰され、壺や卵、魚、畑、豚、子を抱く熊、女王蜂、犬、「野獣の貴婦人」、「生命の木」等、さらに多様な女神の表象が発達したことが提示される。男神も男根、蛇、雄牛等として描かれるようになるが、これらはいくまで女神に内包される存在だったとされる。また、両性具有像も多く、これらは自分自身で継続的に生命を生み出していく女神を表しており、これが本来の

「処女神」の意味だったと主張される。二人の女性が組み合わされた女性像もしばしば見られ、月の満ち欠けと同様、生命を産んだ者（母）とこれから産む者（娘）の連鎖を表す象徴と解釈される。巨石文化では、宇宙の生命と人類の生命の一体性を読み取っている。このような女神文化は、青銅器時代に入ってもクレタ島で継承された（三章）。他の地域と異なり、大型都市が発達せず、自然環境と生活が密接に結びついてきたからだとされる。青銅器時代（四章）になると、征服の時代となり、城壁のある都市が発達するので、このような「農耕的、定居的、平等的、平和的」な女神文化は「階級的、牧畜民的、移住的、戦争志向的」な男性文化によって変えられてしまったとされる。男神はかつてグレート・マザーの息子であったが、今や配偶者となり、両者が結合して世界を産み出すようになるからである。シュメールではイナンナとドウムジ、バビロニアではイシタルとタンムズ（以上五章）、エジプトではイシスとオシリス（六章）の神話が、このような世界観を反映しており、これらが後のギリシアのアプロディーテーとアドーニス（八―九章）、アナトリアのキュベレーとアッティスの神話（十章）に継承されることが指摘される。

このような世界観では、永遠の命の源であるゾエと特定の時間におけるその表出であるビオスの違いが意識されるようになる。たとえば、常に明るさを取り戻す月の存在自体と増していく月、満月、減っていく月、新月の諸相は区別され、常に植物が再生するサイクルと個々の季節は別者と理解されるようになるのである。例えばギリシアでは、グレート・マザーのさまざまな側面が、ガイア、ヘーラー、アルテミス、アテーネー、アプロディーテー、デーメーテル、ペルセポネーに分与される形となる。著者たちは、ここから後に「自然」と「精神」が分けて考えられるようになったと主張している。

第三段階では、さらに男神の力が増大し、グレート・マザーの末裔が男神によって殺され、その死体から世界が造られるという神話が発達したことが示される。後期青銅器時代から鉄器時代初期のバビロニアにおける、マルドゥク神による竜（ティアマト）退治の神話である（七章）。ティアマトは女神の混沌の力の反映であり、マルドゥクはそれを天と地に分断してしまった。その結果、被造物は創造の源泉から切り離され、もはや生命を持たない「物」と考えられるようになり、「精神」によって秩序づけられる物に変えられてしまった。

このような展開は、さらに第四段階として、男神が単独で言葉をもって世界を創造する神話へと変化したとされる。エジプトのプタハ神の神話もこれであるが、何よりヘブル人のヤーウエ・エロヒムの創造物語に最もよく表れている(一一章)。アダムは生命のない土で造られ、そこに精神(神の息)が吹き込まれて初めて生命を持つようになったと記されており、エバはアダムから造られたとされている。この世界観では、物質世界は創造主と区別され、グレート・マザーの場合のように、被造物の中にその内在が認められることはない主張される。また、グレート・マザーはもはや敵でさえなく、その存在さえ意識されなくなつたとされる。「母」なる神が自然との同一化を導き、「父」なる神が「分離」を導くという関係から考えると、このように男神の支配が圧倒的な世界観は、自然との協働関係を次第に減退させるプロセスを反映していると議論される。

第五に、一一一五章では、このようにグレート・マザーの存在を完全に消し去つたかのようなユダヤ・キリスト教的世界観の中でも、「女性原理」はさまざま形で残つたことが示される。絶え間ない生命の表出である女神神話は、人類の集合的無意識の重要な部分であり、

それ抜きの世界観は成り立たないことが議論される。十三章では、エバの中に元来生きとし生けるものの母なる女神が反映されていたが、それがアダムより劣り誘惑に負けた存在へと変えられたことが指摘される。一方、十二章では、カナンの女神であつたアシエラ、アナト、アスタルト、ケルビムなどが、聖書には明言されないが、ヤーウエの配偶神(妻)と理解されていたことが示される。十四章では、聖母マリア信仰は元来の聖書の教えではないものの、そのような崇拜が生まれたこと自体「女性原理」の反映であり、その中に大母神、月の女神、冥界の女神の表象が流入し、イエスと聖婚したと理解される場合さえあることが示される。十五章では、「正統的」キリスト教は男性的元型を強調し、教義を公式化することを重視したのに対して、異端であつたグノーシス派やカタリ派、錬金術、ユダヤ教の神秘主義カバラ等では靈的覚醒による救いを強調したことが示され、それは神の第三位格である聖霊を「知恵」として女神に結びつけたためだと主張される。

最後に十六章では、これまで示された女神神話の表出とそれをつなぐ枠組みが整理され、現在の男性原理に立つ世界は、このような女性原理を取り戻し、女神と男神

の聖婚を回復すべきことが論じられる（Ⅱ四〇六頁等）。そのためには、混沌を追い払って世界を秩序づけるという男性的な英雄意識を捨て、善と悪、物質と精神、生と死、知性と直感といった二元論を排することの必要性が示される。ロゴスの直線的思考、知性、理知とエロスの類比的思考、直観、感性を結びつけるべきだと主張される。また、創造主と被造物は一つの「生命統一体」だとされる（四一七頁）。すなわち、道教に見られるように陰陽の区別は暫定的で、常に変化し、絶えず生き生きと動いているものとされる（Ⅱ四一九頁）。そのため、汎神論やニュー・エイジ思想も高く評価される。著者たちは、本書を通して、「全地球上の人々は、いかにして生命を理解するかという同じ人間の条件を共有しているのみならず、同じやり方でそれを理解しようとするものである」（Ⅱ四〇四頁）ことを示したとし、その中心にあった女神の神話を「一つの生命統一体としての地球」という新たな神話に昇華させるべきだと（Ⅱ四〇五、四二八頁）主張している。

このように、本書が二万年におよぶ人類史に見られる女神神話を俯瞰したスケールの大きな著作であることは疑いない。また、具体例が次々にあげられ、考古資料、

図像資料の図版も多いので目に魅力的であり、長大な著作にもかかわらず、飽きさせずに読むことができる。論旨も明快で、非常にわかりやすい。訳者たちが「図説・世界女神大全」という邦題をつけたことも、そういう意味では適切であろう。

しかし、このわかりやすさこそ本書の最大の問題かもしれない。それは、さまざまなデータを見せているが、それらがすべて著者たちが最初から持っている思想的枠組みの中で解釈され、提示されるからである。「男性原理」、「女性原理」、「集団的無意識」という用語も、人類に共通の無意識が存在するという思想も、みなユングの元型心理学の典型である。その前提を受け入れる者にとっては興味深く読むことができるであろうが、そうでない者にとっては最初から最後まで「そうかもしれないし、そうでないかもしれない」といった中途半端な所に残されてしまう。考古資料などが提示されるが、その個々の事象を批判的に検討したり、著者たち以外の解釈の可能性について議論されることはほとんどない。実際注を見ても、それぞれの調査報告書や論文はほとんど挙げられておらず、各章が一、二の基本文献に基づいていることが見てとれる。本書は、ユング心理学に基づく思想書と

しては評価できるであろうが、歴史書・考古学的著作と捉えることは難しいであろう。著者たちの略歴を見ても、考古学や歴史学の専門家というより、ユング派精神分析家として活動してきたことがわかる。

評者はユング心理学の専門家でもなければ、その思想に同意しているわけでもないので、個々の記述にもかなりの疑問点が残った。著者たちは、その著作目的から当然ながら、まず原初女神が一人で世界を創造し、「女神神話」が支配的であったことを示している。しかし、そのような現象が見られることと著者たちのように「女性原理」に立った世界観をほぼ全面的に受け入れることは同じではない。むしろ、そのような思想的前提のために、たとえば以下のような点が十分検討されていないように思われる。新石器時代にはすでに男性像や雄牛像が多数出土するが、そのような男性的側面は本当に副次的な役割しか果たさなかったのだろうか。女神は絶え間ない命を生み出すものとして高く評価され、男性的秩序はむしろ抑圧的なものとして理解されているが、この女神の文化で神殿売春や人身御供、酒や麻薬による熱狂祭儀がなされたことはどう評価すべきなのだろうか。混沌を生命の統一性という語ですべて肯定的に理解してよいものな

のだろうか。女神において物質世界と精神世界は一体化されたものと理解されていたというが、現実の女性を抽象化、象徴化する行為のうちに、不明確であったとしても、すでに物質世界を超えた何かを意識していた可能性はないのだろうか。生や死は永遠回帰の思想の中で理解されており、死に際しても再生の期待を持っていたされるが、個々の死に対する意識や恐れは本当になかったのだろうか。

次の段階では、男性原理が女性原理を追いやったことが指摘され、戦争や征服は家父長制の秩序にたつアリア人やセム系の人々によって持ち込まれたものだとする。女神の文化には争いの跡が見られないので、女性原理の社会は基本的に平和的で、「人間そのものが侵略的で、好戦的であると結論する必要はない」と主張される（I 一八六頁）。しかし、考古学的に大規模な戦争の痕跡がないことと人間の本性に闘争心がないという性善説的な主張には大きなギャップがある。新石器時代までの社会は家族を中心とした小規模の集落なので、たとえ小さないさかいがあつたとしても、それは残らなかつた可能性もある。考古学的な証拠は、本当に著者たちのテーゼを支えるような性格のものなのか検討されるべきである

う。また、都市時代になり、武器が発達し、城壁が造られるようになったのは、本当に著者たちが示すように男性原理の思想に立ったから、あるいはアーリア人やセム人といった特定の民族がより好戦的だったからなのだろうか。むしろ、社会が複雑化、大規模化していく中で、必然的に争いが顕在化し、それにあつた神話が発達したとは考えられないのだろうか。また、そのような人間世界の現実に対して、言語、法律、理性によって世界を秩序づけることは、特定の思想や民族と結びつけなくても社会規模の増大とともに不可避なことだったのではないだろうか。

第三段階では男性原理が女性原理を追いやった頂点として、男神マルドゥクによる女神ティアマト退治が紹介される。しかし、著書たちも認めるように、この神話は鉄器時代ではなく、すでに第二段階のシュメル時代から存在している。バビロニア時代のもののほうが「より残酷」になつたというあいまいな基準で、これを経年的な違いとしてよいものなのだろうか。

第四段階ではユダヤ・キリスト教批判が展開されるが、これも紋切型である。著者たちは、西洋人はキリスト教的な「神話的条件づけ」から逃れることができない（II

八九頁）としているが、むしろ彼らが前提とし、批判しているのは近代西欧思想であつて、ユダヤ・キリスト教そのものではないように思われる。この二つの違いを意識していないこと自体に大きな問題があるのではないだろうか。

著者たちはヤーウエーエロヒームとマルドゥクやゼウスには驚くほど共通点が少いとしている（I三五七頁）が、同時にキリスト教は男性原理が完全に勝利した形であり、すでに女神は敵として意識されることさえなくなつたものだとしている。しかし、もし共通点が少いなら、どうしてこのように単純な発達モデルで捉えるのだろうか。聖書の神は言語上たしかに男神であるが、すでにそのような対立を超えた存在として示されている可能性が高い。著者たち自身そのことを意識し、アシエラ、アスタルト、アナト、ケルビムなどの女神がヤーウエの配偶神になつたと主張しているが、古代イスラエルではむしろ彼らはすでに独立した女神としての性格を失い、ヤハウエ自身のうちにある女性的属性として受け入れられていたと考えることもできる。とりたててフェミニズム神学など持ち出さなくても、ヤハウエに知恵、豊穡、憐れみ（ヘブル語では「子宮」と同語根）などの属性があ

ったことはあきらかであり、イエスの「わたしは、めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか」(ルカ13・34、マタイ23・37)といった表現等はあきらかにヤハウエの女性的側面を表している。すなわち、聖書の神は女性原理も含めた男性原理を示しているのであって、必ずしも対立して描かれてはいるとは言えない。「女性原理は男性原理を含めることができるが、男性原理は女性原理を含めることができない」(一四六頁)という主張は、いったい何を根拠になされているのだろうか。

また、ユダヤ・キリスト教が成立した後の社会(第五段階)では、非正統的なグノーシス主義やマリア崇拜等において特異な形で女神的、感覚的な要素が強調されたことは事実であるが、そのような要素は著者たちが示すような異端的グループだけに認められるものではない。正統的キリスト教の伝統においても、理性的に教義を定義しようとする動きと同時に感性で信仰を捉える神秘主義(敬虔主義)的な動きが、常に車の両輪として並行していた。ギリシア正教における修道生活の強調、ローマ・カトリックのロヨラ、フランチェスコ、カルメル会等の神秘的傾向、プロテスタントのルターが雷に打たれ

て回心し、ウェスレーが「心が燃えた」体験をしたこと、現在最も成長している教会がペンテコステ派(聖霊派)である事実はそのことを示している。理知的方向に傾いた時期もたしかにあるが、感覚的、女性的側面も正統的キリスト教の中に綿々と流れているのである。

精神と物質の二元論をユダヤ・キリスト教的だとするのも、近代西欧哲学とキリスト教の混同ではないだろうか。近代合理主義の発達とともに、カントは二元論を唱え、叡智界(神など)と現象界(物質世界)の断絶を唱えた。それ以来、近代西欧哲学では次第に精神的(むしろ超越的)なことは現象学的に括弧にくくり、物質世界のことだけを認識できる対象とするようになってきた。たとえ合理主義がキリスト教思想から生まれたものだとしても、その結果生まれた西欧社会は「ポスト・キリスト教社会」、世俗的相对主義の社会にすでになつていたのであって、元来のキリスト教信仰そのものとは言えないであろう。むしろ、聖書は物質世界を超えた超越神を想定しながらも、同時にこの神が人間との接点を持つとしたことを語っている。「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる」と語る詩篇19・1やローマ書1―2章は明確に自然啓示の有効性を示してお

り、その他にも聖書啓示、イエスの到来による啓示などが教義として存在するからである。また、聖書は男性原理に立つ直線的思想というのも正確でない。聖書には、失樂園から復樂園に向かう直線的思想と同時に、予型論的論理が存在し、型となるような出来事や人物が繰り返し登場し、神と世界の関わり原則となっていることを検討されたい。

すなわち、ユダヤ・キリスト教思想の中には、著者たちのいう「男性原理」「女性原理」の両面が見られるのであって、そう見えなくしているのは、彼ら自身が近代西欧の「神話的条件づけ」に縛られているからではないのだろうか。精神と物質をすべて物質世界の中にいれて見ようとする著者たちの姿勢は、むしろこの近代主義にたつて人間理性で捉えられる物質世界だけを現象学的に見る姿勢から来ているように思われる。聖書は、超越していると同時にインマヌエル（「神、我らとともにいます」の意）である神を語っているのである。超越神を捉えられるとするユダヤ・キリスト教思想をどう評価するかは課題であろうが、少なくとも聖書が物質と精神を完全に分けて考える世界観に立っているというのは正確でない。

著者たちは、人間には「女神神話」のような集団的無意識があり、そこから共通の思考を認めることができる」と主張する。たしかに古ヨーロッパからオリエントを経てマリアまで共通した表象が断続的に現れることは事実である。しかし、そのことは、これらの現象を著者たちの枠組みであるユング心理学的、ニュー・エイジ的、道教的な世界観でとらえなければならぬことを必ずしも意味しない。「男性原理」「女性原理」の重要性を意識していても、彼らとは異なる形でその組み合わせを考えることも十分可能だからである。ユング心理学もニュー・エイジもポスト・モダン思想の一つの形態であつて、地球上のすべての人がそれを共有できるようなものではないであろう。

「地球をひとつの生命」とするという結論も、非常にありきたりで厳密さに欠ける。それは地球自体に命があるということなのか、外から命を得て育んでいるのか、地球は本当にそれ自身で新しい命を造れるのか、本書の議論だけでは何とも言えない。女性原理を大事にすると言った場合、個々の命はどう考えるのか、混沌とした社会でよいのか、倫理基準はなくてよいのか等、ならん答えられていない。「女性原理」は「男性原理」と聖婚さ

れるべきだと言われているが、その場合「男性原理」が
 どのような役割を果たすのかも明確にされていない。言語
 による秩序を批判するあまり、著者たち自身がなんとなく
 くイメージだけで語り、論理的思考や正確なコミュニケーション
 ーションを放棄しているような印象を感じざるを得ない。
 総じて見ると、本書は「女性原理」とも呼ぶべき思想
 が、人類の歴史の中に一貫して流れていることを示すこ
 とには成功していると言えるであろう。こうしたテーマ
 自身魅力的であり、資料の提示の仕方もわかりやすいの
 で、心地よく読むことができる。しかし、そうした現象
 を著者たちのように一面的に解釈しなければならぬ根
 拠はほとんど示されておらず、彼らの主張する独特な世
 界観との間には論理の飛躍がある。著者たちはただ自分
 たちの立場を断じるだけで、他の立場の可能性を検討す
 る姿勢がほとんどないからである。資料の扱い方も、最
 初に前提ありきで、歴史や考古学の研究書としては評価
 が難しい。むしろ本書は、最初に記したように、ユング
 心理学の前提に立つ思想書として理解されるべきである
 う。そうすれば、その中心概念のひとつである「女性原
 理」から、女神の現象をどう体系的に読ことができるか
 を知る上で役立つ書だと評価できるであろう。

翻訳には、それぞれ神話学の研究者として評価の高い
 森雅子氏と藤原達也氏が当たられ、適切な翻訳者を得た
 といえる。日本語は概してこなれて読みやすく、原著の
 イメージを的確に伝えていられると思われる。若干気になっ
 たのは、以下の語である。聖書の神の第三位格は「精
 霊」でなく「聖霊」(I五〇頁)、personal god は「個人
 神」ではなく「人格神」(II一一〇頁)と訳するのが通例
 であり、第一二章タイトルの「イヴ」は英語読みなので、
 日本語訳聖書の「エバ」(ギリシア語の発音にもとづ
 く)か「ハヴァ」(ヘブル語)とすべきであろう。また、
 二人の翻訳者の訳語の調整はむずかしかつたと想像され
 るが、中心概念であるグレート・マザーは、そのままカ
 タカナ表記にするのか(I巻)、「母神」「大母神」(II
 巻)にするのか統一してほしかった。しかし、これだけ
 の大著をスムーズに訳しきった二人の翻訳者の労を多と
 したい。